

第三章 非生産的労働

一

労働は生産に欠かせないが、その結果がつねに生産として現れるとは限らない。生産を目的としない労働にも、社会にとって有用なものは多い。このため、労働は生産的労働と非生産的労働に分けて論じられてきた。どの種類の労働を非生産的とみなすべきかをめぐって政治経済学者の議論は続いてきたが、彼らは必ずしも、実際には事実関係を争っているのではないことに気づいていなかった。

多くの論者は、労働を「生産的」と呼べるのは、その成果が目に見える物的な対象として残り、しかも他人に譲り渡せる場合に限るとしてきた。これに対してマカロツクやセイらは、「非生産的」という言い方には見下しが含まれると受け取り、費用に見合う利益や快楽を生む有用な労働まで同じ呼び名で一括するのは不当だと反論する。官吏や陸海軍の将兵、医師、弁護士、教師、音楽家、舞踊家、俳優、家事使用人などは、実際

に報酬に見合う働きをしており、人数もその職務の遂行に必要な範囲を超えない限り、「非生産的」と決めつけられるべきではない、というのが彼らの主張である。しかしこの見方では「非生産的」という語が、浪費的、または無価値とほとんど同じ意味で受け取られているように見える。だが争点はそこではない。生産が人間の目的のすべてではない以上、「非生産的」という語が必ずしも侮辱や非難を意味するとは限らず、この場合もそうした意図はない。要するに問題は、用語と分類をどう整理するかにある。ただし用語の違いは軽いものではなく、どちらの言い方も全体としては事実と両立しうる場合であっても、人々が注意を向ける先を変えてしまいがちである。だからこそ、労働に對して用いられる「生産的」「非生産的」という語が持ちうるさまざまな意味を、あらためて掘り下げて考える必要がある。

物的な財を生産するといっても、実際に生み出されるのは、それを形づくる物質そのものではないことを忘れてはならない。世界中の人間が総力を挙げてどれほど働いても、物質を一粒たりとも新たに生み出すことはできない。ラシヤや毛織物を織るとは、羊毛の粒子を一定の手順で並べ替え、組み替えることにすぎず、トウモロコシや穀物などの作物を育てるのも、種子と呼ばれる物質の一部を、土や空気から粒子を取り込める状況

3 第三章 非生産的労働

に置き、植物という新たな結合や組み合わせが成り立つよう手配する作業にとどまる。

人間は物質を創造できない一方で、これまで役に立たなかったものを役に立つものへと変える性質を、物質に持たせることはできるのであり、私たちが生産するもの、また生産したいと望むものは、セーが指摘した「効用」である。労働が生み出すのは対象そのものではなく効用であり、消費して失われるのも対象そのものではなく、用途に適していた性質であって、対象を構成していた物質は形を変えながら残り続ける。こうした前提に立つなら、対象を生産するといっても結局は効用を生み出しているのだから、効用を生む労働はすべて生産的とみなしてよいのではないか、というのがセーらの問題提起である。骨折した手足を整復して治療する外科医や、社会に安全をもたらす裁判官や立法者が生産的と呼ばれず、ダイヤモンドを切断して研磨する宝石職人だけが生産的とされるのはなぜなのか。生活の糧につながる技術を教える教師を生産的でないとし、味覚の一時的な快楽のためにボンボンを作る菓子職人を生産的と認めるのは、どのような理屈で、どう説明すればよいのか。

これらの労働がいずれも効用を生み出すことは確かであるが、効用を生み出すというだけで人々がふだん抱いている「生産的労働」の観念が満たされるのだとすれば、そも

そも今の議論は問題にすらなりえない。一般に「生産」「生産的」という語は、何かが生み出されることを前提とする省略的な言い方であり、その「何か」は、通常の理解では効用ではなく富だと考えられている。つまり、生産的労働とは富を生み出す労働を指すことになる。そうであるなら、第一章で触れた「富とは何か」という問い、すなわち富は物質的な産物に限られるのか、それとも有用な産物全般を含むのかという論点に、改めて立ち戻って検討する必要がある。

一一

さて、労働によつて生み出される効用には三種類ある。それは次のとおりである。

まず考えられるのは、効用が外部の物に固定され、目に見える形として備わっている場合である。労働によつて外部の材料に、人間にとつて役に立つ性質が付与され、利用できる物として成り立つ。広く見られる一般的な例であり、とくに説明を加えるまでもない。

第二に挙げられるのは、人に固定され、本人の能力や資質として身についた効用であ

る。ここでのいう労働とは、人を自分や他人の役に立つ性質や能力を身につけた存在にするために費やされる労働を指す。これには、学校教員や家庭教師、大学教授など、教育に携わるすべての人々の労働が含まれるだけでなく、国民の向上に実際に成果を上げている限りでの政府の施策、社会に利益をもたらす限りでの道徳家や聖職者の活動、生命の維持および身体的または精神的な機能の保持に役立つ限りでの医師の労働、体育の指導者や、さまざまな職業、諸科学、芸術の教師の労働、さらにそれらを学ぶ者の努力も含まれる。要するに、生涯を通じて自他の知識を高め、身体的または精神的な能力を養うためにだれかが費やすすべての労働が、これに当たる。

第三で最後の類型は、物に固定されたり物に体现されたりする効用ではなく、提供されたサービスそのものから生まれる効用であり、一定の時間のあいだ快楽を与え、不便や苦痛を避けさせる一方で、人や物の性質が改良されたという恒久的な成果は残らない。この労働は効用を直接生み出すために用いられ、第一や第二の類型のように、別の物を、効用を生む状態に整えることを目的としない。音楽の演奏者、俳優、公の演説者や朗読者、語り手、見世物師などの労働が典型であり、観客の感情や気質、享樂のあり方に、その場を超えた良い影響や害が及ぶ可能性はあるものの、それはいずれも意図された効

果ではなく、提供者が労働し、受け手が対価を支払って得るものは目先の快樂に限られる。軍隊や海軍の労働も同様で、最善の場合でも国が征服されたり損害や侮辱を受けたりするのを防ぐにとどまり、サービスではあっても、それ以外の点で国を良くも悪くも変えない。立法者や裁判官など政府の担い手も、国民の知的水準を高める影響は別として、通常の職務に限れば同じ類型に入り、彼らのサービスが生み出す効用は平和と安全の維持である。運送業者や商人、販売業者も物に新たな性質を加えないのだから同じ類型だとする見方もあり得るが、彼らは物に「必要とされる場所にある」という性質を付け加えており、これはきわめて有用で、その効用は物が使用に必要な場所に存在するという形で物そのものに体现されるため、付与に要した労働に見合うだけ価格を上乗せして販売でき、したがって、この労働は第三の類型ではなく第一の類型に属する。

三

ここでは、三つに分けた労働のうち、どれを富を生む「生産的労働」と見なすべきかを検討する。というのも、「生産的」という語をそれだけで用いると、富の生産を指す

ものと理解されるべきだからである。第三の区分に属する効用は、味わっている間だけ存在する快楽や、行われている間だけ存在する役務からなり、明らかな比喩でもないかぎり富とは言いにくい。富の観念には蓄積できることが不可欠である。生産されても、用いる前に一定期間保管できないものは、一般には富と見なされない。なぜなら、それがどれほど多く生み出され享受されても、受益者は少しも豊かにならず、境遇も少しも改善されないからである。他方、有用でしかも蓄積できる産物を富に含めることは、用法をそれほど大きく損なうわけではない。実際、一国の職人の技能や活力、粘り強さは、工具や機械と同じく、その国の富の一部と数えられている。以上の定義によれば、人間に備わるものとしてであれ、ほかの生物または無生物に体现されるものであれ、永続的な効用を生み出すことに用いられる労働はすべて生産的と見なすべきである。この呼び方は、分類の目的に最も資するものとして、以前の著作で私が推奨したが、いまでもその意見に変わりはない。

ただし、人間の産業上の能力に「富」という語を当てはめると、世間では暗黙のうちに物としての生産物が想定されがちである。職人の技能が富と見なされるのも、それが物質的な意味での富を得る手段になる場合に限られ、その目的に目に見える形で結びつ

かない資質は、富としてほとんど扱われない。一国についても、住民の才能や徳、教養といった貴重な資産を持っていたとしても、比喻でないかぎり「より豊かになった」とは言いにくい。もつとも例外は、それらが市場で売れる商品と見なされ、古代のギリシヤ人や近代のいくつかの国がそうしたように、他国の物的な富を呼び込む手段になる場合である。そこで、私が新しい専門用語を作る立場にあるなら、生産物が物質かどうかではなく、どれだけ持続するかを基準に区別したいところである。しかし、日常語として定着した語を用いる以上、既存の用法への抵抗はできるだけ小さくするほうが現実的である。大衆語の意味を無理に広げて用語法をわずかに改善しても、新旧の連想が衝突して分かりにくくなるという代償を伴い、その負担が成果に見合わないことが多いからである。

本書では、富という語は物質的な富に限って用い、生産的労働という語も、物質的なものに具体化された効用を生み出す努力に限って用いる。しかし、この限定された意味においても、その射程はできるかぎり広く取り、直接には物的生産物を生み出さない労働であっても、最終的に物的生産物の増加につながるかぎり、生産的という呼び名を退けない。たとえば、製造技能を身につけるための労働は、技能そのものを生み出す点に

よってではなく、その技能によって製造品が生み出され、また修業の労働がその生産に不可欠に寄与する点によって、生産的に分類される。産業の繁栄に不可欠な保護を与える政府職員の労働も、その保護が何らかの形でなければ、現在の水準の物質的富は維持できない以上、物質的富の生産に關しても生産的に数えざるをえない。これらの労働は、鋤を引く農夫や綿を紡ぐ紡績工のように、直ちに生産物を生み出す労働に比べれば、間接的または媒介的に生産的と言えるが、いずれも社会を、取りかかる前よりも物質的生産物の面で豊かにし、物質的富を増やすか、または増やす方向に働く点では共通している。

四

これに対して非生産的労働とは、物質的な富の創出に結びつかない労働のことであり、それがどれほど大規模に、また巧妙かつ成功裏に行われたとしても、共同体ひいては世界全体を物質的生産物の面でより豊かにすることはなく、むしろその労働に従事している間に労働者が消費した分だけ貧しくする。

政治経済学の用語でいえば、労働の成果が即時の享樂で終わり、享樂の恒久的な手段として蓄積された資本を増やさないものは、すべて不生産的である。また本定義によれば、どれほど重要で永続的な利益に結びつく労働であっても、その利益の中に物的生産物の増加が含まれないかぎり、不生産的に分類される。友人の命を救う労働も、その友人が生産的労働者であり、消費を上回る生産を行うのでなければ、生産的ではない。宗教心のある人には魂の救済のほうが命の救助よりはるかに重要な奉仕に見えとしても、それだけを理由に宣教師や聖職者を生産的労働者と呼ぶことはできない。ただし、南太平洋の宣教師が一部で行ったように、宗教の教えに加えて文明の技術や技能も教える場合は例外である。反対に、国家が宣教師や聖職者を多く養えば養うほど、ほかのことに支出できる余地は小さくなる一方で、農業者や製造業者が働けるように適切な支出を増やせば増やすほど、ほかの目的に回せる余力は大きくなる。ほかの条件が同じであれば、前者は物的生産物の蓄えを減らし、後者はそれを増やす。

非生産的労働は、生産的労働と同じくらい役に立つこともあり、長い目で見て持続的な利益を生むという点では、むしろ価値が高い場合もある。あるいは、その効用は快い感覚を与えることだけにとどまり、終われば何も残らないこともある。さらに、その快

ささえ生まず、まったくの無駄に終わる場合もある。いずれにしても、それによって社会や人類全体が豊かになることはなく、むしろ貧しくなる。何も生み出さない者が何かを消費すれば、その間、本来なら社会に残っていたはずの物的生産物がそれだけ減るからである。ただし、社会が豊かにならなくても、個人が豊かになることはありうる。非生産的労働者は、役務によって快楽や利益を得た側から報酬を受け取り、それが本人の富になることがあるが、その増分は相手の減分とつり合う。相手は支出に見合う満足や価値を得たとしても、支払った分だけ手元の富は減る。仕立て屋が上着を作って売る場合は、代金に移るだけでなく、以前は存在しなかった新しい上着という富も加わるのに対し、役者が得るのは観客の資金が役者に移るだけで、観客の側に埋め合わせとなる富は残らない。したがって、共同体全体として役者の労働によって得るものは何もない。さらに、役者の収入のうち消費された分は共同体の損失となり、共同体に残るのは役者が貯えた分に限られる。もっとも、ある共同体が他の共同体の負担の上に、非生産的労働によって自国の富を増やすことはありうる。個人が他人の犠牲で富を得るのと同じ仕組みであり、イタリアのオペラ歌手やドイツの家庭教師、フランスのバレエ踊り子などが得た報酬を持ち帰れば、その限りではそれぞれの母国の富になる。古代ギリシャの小

国、とりわけ粗野で後進的な国々は兵士の供給源であり、兵士は東方の君主や太守に雇われて無益で破壊的な戦争を担い、貯えを携えて帰国し、晩年を故国で過ごした。彼らは非生産的労働者であり、彼らが受け取った給与と略奪品は、それを与えた国々にとって見返りのない支出だったにもかかわらず、世界全体の利益ではないにしても、ギリシヤにとっては利益だった。さらに後の時代、同じ国とその植民地はローマ帝国に別の種類の冒険者を供給した。彼らは哲学者や修辞家と呼ばれ、上流階級の若者に価値が高いとされた教養を教え、彼らも主として非生産的労働者だったが、その多額の報酬は故国の富となった。しかし、これらのいずれの例でも世界全体の富が増えたわけではない。

役務が有用であっても、世界は物的富の一部を犠牲にしてそれを得ただけであり、役務が無益なら、彼らが消費したものはすべて世界にとって無駄に終わる。

無駄になるのは不生産的な労働だけではなく、生産的な労働であっても、実際の生産に本当に役立つ以上に投入されれば無駄になり得る。その背景には、働き手の技能や熟練の不足、あるいは指揮や監督をする側の判断ミスによって、人員や道具の配置、作業の割り振りが適切でなくなる事情がある。たとえば、経験から二頭の馬と一人で足りると分かっているのに、農夫が三頭の馬と二人で耕し続ければ、目的が生産であっても余

分な労働は無駄になる。同様に、新しい工程や方法を採用しても従来よりよくならず、同程度にとどまるか、かえって悪いと分かった場合には、発明を完成させて実用化するために費やした労働も、目的が生産であつても無駄になる。さらに、生産によつて富が増えたとしても、その富が当面求められていない種類であれば、国をかえつて貧しくすることもあり得る。需要を超える量を生産したために商品が売れなくなる場合や、取引が始まる前から投機目的で船渠や埠頭、倉庫を建てる場合がこれに当たる。北アメリカの一部の州では、時期尚早な鉄道や運河の建設がこの種の誤りだったと考えられており、イングランドでも鉄道事業が不釣り合いに拡大した時期には、ある程度同じ例に倣つてしまつたのではないかと、しばらく疑問視されたことがある。差し迫つた課題があり、資源も限られて早い回収が求められる局面で、遠い将来の回収を見込んで労働を投じると、その間に労働者が消費する分だけ当座の国力を弱め、ひとまず短期で回収できる事業を選び、遠い将来の利益を狙う事業を後回しにしていれば得られたはずの水準と比べて、結局は国をそれほど豊かにしないことにもつながりかねない。

五

生産的か非生産的かの区別は、労働だけでなく消費にも当てはまる。共同体の成員はすべてが労働者ではないが、成員は全員が消費者であるため、その消費は生産的消費と非生産的消費に分かれる。生産に直接にも間接にも寄与しない者は非生産的消費者であり、生産的消費者といえるのは生産的労働者に限られるが、この生産的労働者には、実作業だけでなく、指揮、管理、運営、監督といった労働も含まれる。ただし、生産的労働者の消費がすべて生産的消費になるわけではなく、生産に関わる立場であっても非生産的に消費することがある。健康、体力、労働能力を維持し高めるための消費や、次の生産的労働者を育てるための消費は生産的消費に当たるが、怠惰か勤勉に関係なく、快楽や贅沢を目的とする消費は、生産を目的とせず、また生産を少しも前進させない以上、非生産的とみなすべきである。もつとも、労働の能率を最大に保つうえで、ある程度の楽しみは必需品に含めてよい場合がある。結局のところ、共同体の生産力を維持し増進させる方向に向かう消費だけが生産的消費であり、その対象は、土地の力や土壌、材料、生産手段や生産用具の量と効率、さらに人々の力にまで及ぶ。

生産にも資さず、生命や体力の維持にも役立たないのに消費される商品は多い。たとえば金の飾りひもやパイナップル、シャンパンは、毎年消費される分について、もっと安価な品でも同程度の満足が得られるのだから、非生産的消費に当たるとみなされ、それを生産するために費やされる労働も、政治経済学者のいう生産的労働とは言いにくい、と考えられる。実際、非生産的な消費者向けの品を作る労働は、社会を恒久的に豊かにすることにはつながりにくい面がある。他方で、何も生み出さない人の上着を仕立てる仕立屋は生産的労働者であるにもかかわらず、その上着は数週間から数か月で擦り切れ、着る人がそれを埋め合わせるだけの価値を何も生み出さないため、共同体は同じ金額を歌劇場の席代に払った場合と同様、結局は富を増やしていない、という事情もある。ただしその上着がもっている間、すなわち社会が非生産的な成員を通じて労働の成果を非生産的に消費するまでの間は、その労働によって社会はより豊かになっていたのであり、金の飾りひもやパイナップルも、上着より必需品からいっそう遠いという違いがあるだけで、これらも消費されるまでは富として存在する。

六

以上から、共同体の富にとっては、生産的労働と非生産的労働という区別以上に、生産的消費を賄う労働か、非生産的消費を賄う労働かという区別のほうが重要だと分かる。言い換えれば、国の生産資源を維持し増やすために用いられる労働か、それ以外に用いられる労働かの違いである。国の年間生産物のうち、生産的に消費されるのは一部にすぎず、残りは生産者自身の非生産的な消費と、非生産階級の消費に充てられる。仮に年間生産物の半分しか前者の目的に回らないなら、国の恒久的な富を左右する仕事に従事する生産的労働者も半分にとどまり、残る半分は毎年、さらに世代を超えて、消費されて消え、見返りを生まない品を生産し続けることになる。そして彼らが消費する分は、国の資源に恒久的な効果を残さないという意味で、非生産的に消費されたのと同じように失われる。仮にこの後者の半分の労働人口が働くのをやめ、政府や教区が一年間遊ばせたまま扶養したとしても、前者の半分は従来どおり、自分たちと後者の半分に必要な必需品を生産し、原材料や道具の蓄えを減らさずに維持できるだろう。非生産階級は飢えるか自活を迫られ、共同体全体も一年間は必需品だけで暮らす状態に落ち込むが、生

産の源泉は損なわれず、翌年の生産量は、そうした不活動の期間がなかった場合より必ずしも少なくなるとは限らない。これに対して、前者の半分が従来の仕事を中断し、後者の半分だけが働き続けるという逆の事態になれば、十二か月の終わりには国は完全に窮乏していたはずである。

裕福な国で一年間の生産物の大きな部分が非生産的な消費に回っていることを残念がするのは大きな誤りであり、それは社会が生活必需品を満たしたうえで、楽しみやより高度な目的に充てられる余力を持っていることを嘆くのと同じである。この余剰の生産物は、単なる生存を超えた共同体のさまざまな需要を満たすための財源であり、享楽の規模や非生産的な目的を実現する力の指標でもあるのだから、これほどの余剰をそうした用途に回すことができ、実際に回していることは、むしろ喜ぶべきことである。問題があるとすれば、その余剰の配分が極端に不平等で、多くが価値の低い対象に費やされ、見返りとなる働きやサービスをほとんど提供しない人びとに大きな取り分が渡っている点にある。